19 東洋のルソー：中江兆民

NAKAE Chomin
(National Diet Library, Japan)
中江兆民（国立国会図書館）

現在の高知県に生まれた中江兆民(1847-1901)は、長崎や江戸でフランス語を学び、1871（明治４）年にフランスへ向けて出発しました。1871（明治５）年からから 1874（明治７）年までリヨンとパリに滞在し、法律学、歴史学や哲学を学ぶ傍らでヴォルテール、モンテスキュー、ジャン=ジャック・ルソーの著作に親しんで、自由民権思想の基礎を築きました。

帰国後は、東京で仏学塾を開いて、フランスから持ち帰った思想を広めました。自由民権運動の気運が盛り上がる中、1881（明治 14）に西園寺公望（https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100479014.pdf）と共に「東洋自由新聞」を創刊しました（１か月余りで休刊)。翌 1882 年には、仏学塾からジャン=ジャック・ルソーの「社会契約論」(Du Contrat Social ou Principes du droit politique）の漢文訳である「民約訳解」を刊行しました。この本が民衆に広まると、自由民権運動がさらに活発になりました。これは、明治時代の日本で、憲法の制定と国会開設を目指した政治社会運動でした。兆民は、ルソーの思想を日本に紹介したことから、「東洋のルソー」と言われています。

兆民は、「自由は取るべき物なり。貰うべき品にあらず。」という言葉を残しました。兆民の思想は、一部の政治家に独占されていた明治政府と対立したことがありました。しかし、1889（明治 22）年に大日本帝国憲法が公布（1890 年施行）され、翌 1890（明治 23）年には第一回衆議院議員選挙が行われて兆民も当選しました。帝国議会が開催された日本の社会は、大きく変革しました。

掲載日:2022 年 10 月５日